

中古の指示副詞「かう」について

——「かく」との比較にみられるその位相性——

井 上 博 嗣

はじめに

古代語の陳述副詞について個々の語のその意味用法を平成七年以来小稿に述べてきた^{註1}。ここ暫くは指示副詞「さ・かく」の程度副詞性・陳述副詞を考察してきている。その中で、「かう」は「かく」の音便化したもので文法的意味用法は基本的には変らぬものに思えるが、後出の「かう」はその文体的（全体的・個人的）用法が「かく」と同一と言えぬかに感じてきた。明確に言える最たることは、「かく」は和歌やその詞書に用いられるが、「かう」はそれらに全く用いられることがないことである。そのことの位相性を「かう」の「かく」との比較において、文法的用法・会話語性・地の文語性や作品群の相異、個々の作品に依る差の中に求めてみたが確たるものを見い出せずに終っている。本稿はその検証報告に過ぎない。この分野で研鑽を積まれている方への御参考になればと願ってのことである。

資料としたものは、ほぼ従来同様、竹取・伊勢・大和・うつほ・落窪・源氏物語、土左・和泉式部・紫式部・かげろふ・更級日記、枕草子、大鏡・栄花物語、古今和歌集から千載和歌集に至る勅撰和歌集にみられる「かう」・「かく」の全

用例である。源氏物語は対校源氏物語新釋、勅撰和歌集は新編国歌大観、他は全て日本古典文学大系の本文に依っている。従って例文に示す頁数・行数などは全てそれらのものである。

(一)、全般的な用いられ方

まず、全資料にみられる「かく」^{註2}の使用例二〇五七例に対して、「かう」のそれは四三四例と少ない。「かう」の用例数は「かく」の二一・一％にすぎない。「かく」の方がより一般的に使用されていたと言える。

又、「かく」は資料とした全作品に用いられているが、「かう」は選り好みがある。全く用いられていない作品に、竹取・伊勢物語^{註4}、土左日記、全ての勅撰和歌集がある。

竹取・伊勢物語、土左日記は成立年代の古さ、男性の手になる作品と云う点で共通している。又、伊勢物語と勅撰和歌集は和歌とその説明文とも言いうる点で共通している。「かく」はこれらの文体（全体的）に何の抵抗もなく用いられているのに「かう」はそれに馴染めない語なのである。大和物語の「かう」の使われ方もその延長上にあるかと思う。大和物語においては、「かく」四四例の使用例に対して、「かう」九例の使用は、「かく」の二〇・四五％であり、全用例での「かく」の使用例に対する「かう」の使用率と変らないが、物語中での使用のありようが大きな片よりを示す。つまり、和歌に対する説明文（物語文）が長くなる一三三段以後の章段に限られている。又、大鏡での「かう」の使用二例も慣用的表現と言えなくない（後述）。男性の手になるものの線上にあるのかとも思う。尚、栄花物語「かく」二六一例に対して「かう」四五例（二七・二％）は全例での比率より三％程下がるが、十分に存在感はある。

「かう」が「かく」と使用例数においてそこそ肩を並べるのは、紫式部日記・更級日記と枕草子である。紫式部日記は「かく」一三例に対して「かう」一一例でその比率は八四・六％、更級日記は「かく」五例に対して「かう」四例でそ

の比率は八〇%、枕草子は「かく」二四例に対して「かう」一九例でその比率は七九・二%である。日記の二作品、随筆とされるものに際立つ。ちなみに源氏物語のそれは、「かく」八一五例に対して「かう」は三三四例で二八・七%となる。紫式部日記での八四・六%と比べると作品群的文体的差違と言えよう。逆に和泉式部日記は、「かく」一三例に対して「かう」は一例しかみられない。和泉式部日記は紫式部日記とほぼ同時期に成立しているとされている。とすれば作品群的差違は紫式部にあつてのことで少なくとも和泉式部日記においては個人的文体に求めるしかない。枕草子も随筆と云う文体の必然するものか、著者個人の文体のもたらすものか結論しにくくなる。

竹取・伊勢・大和・うつほ・落窪・源氏物語を物語群、土左・和泉式部・紫式部・かげろふ・更級日記を日記群、枕草子を随筆、大鏡・栄花物語を歴史物語群、勅撰和歌集を和歌集群と称すると、「かく」に比べて「かう」の使用率の高いのは、随筆の七九・二%を筆頭に日記群の二九・七%、物語群の二一・九%、歴史物語群の一四・二%となる。日記群の数値を抑えているのは土左日記の〇例、和泉式部日記の一例使用で、物語群でのそれは竹取・伊勢物語の〇例で、歴史物語でのそれは大鏡の二例使用に依る。

「かう」については、その口語性が問題にされもしてきた。^{註5}「かく」との比較においてその事を次にみる。

「かく」の全例二〇五七例中、会話文での使用は八六〇例で四一・八%、心中表現での使用二一〇例で一〇・二%、地の文での使用八八八例で四三・二%、消息文での使用二九例で一・四%、和歌での使用七〇例で三・四%となり、会話文系での使用は八六〇十二一〇例計一〇七〇例で五二%と大半を少し上まわる。「かく」は会話語文系地の文系ほぼ同じように用いられている。

「かう」のそれは、全例四三四例中、会話文での使用二三九例で五五・一%、心中表現七八例で一八%、地の文での使用一〇三例で二三・七%、消息文での使用一四例で三・二%となる。「かく」の会話文系での使用二三九七八〓三二六

例は七二・八%となり、その口語性の高さを物語る。

このことを先の作品群別にみると、

物語群での「かく」の使用一五三二例中、会話文での使用七四四例で四八・九%、心中表現での使用一六〇例で一〇・五%、地の文での使用五七六例で三七・八%、消息文での使用二四例で一・五八%となり、会話文系での使用率は五九・四%となる。先の全用例でのそれより七・四%高い。

日記群での「かく」の使用一一八例中、会話文での使用一七例で一四・四%、心中表現での使用一三例で一・一%、地の文での使用七九例で六六・九%、消息文での使用五例で四・二%、和歌での使用五例で四・二三%となる。会話文系での使用率は二五・四%となり、地の文系での使用率七四・六%は、地の文系での使用の多さを示す。先の全用例での地の文系使用率四〇・六%をも大きく上まわる。そうさせている最たるものは土左日記で、一三例中全例が地の文での使用であり、次いで、かげろふ日記での使用七四例中地の文での使用四九例の六六・二%が高い。会話文での使用(三例)が地の文での使用(二例)を上まわるのは、唯一更級日記である。

随筆での「かく」の使用例二四例中、会話文の使用一五例で六二・五%、地の文の使用例二五%、消息文での使用三例で一二・五%となり、会話文系での使用率が六二・五%と全例のそれを一〇%余り、物語群でのそれをも三%余り上まわる。

歴史物語群では日記群同様に地の文系での使用が目立つ。全例三三五例中、会話文での使用八四例で二五・一%、心中表現での使用三四例で一〇・一%、地の文での使用二一六例で六四・五%となり、日記群の地の文系使用率七四・六%に一〇%程及ばないが会話文系をかなり上まわる。

以上のような「かく」に対して、「かう」は、以下のようなものである。

中古の指示副詞「かう」について

物語群での「かう」の全例三三三例中、会話での使用二〇六例で六一・八六%、心中表現での使用六四例で一九・二%、地の文での使用五八例で一七・四%、消息文での使用五例で一・五%となる。会話文系での使用率は八一・〇六%で「かく」の場合の五九・四%より二一・七%も高い。「かう」全例での使用率七二・八%よりも九%程高い。「かう」は物語群にあつては会話文系の文に大方が使用されるのである。

日記群での「かう」の全例三五例中、会話文での使用一〇例で二八・六%、心中表現での使用六例で一七・一%、地の文での使用一五例で四二・九%、消息文での使用四例で一・四%となる。地の文系での使用率が五四・三%となる。このことは「かく」のその七一・一%には一六・八%も低い、会話文系の上まわることが注目される。

中にあつて極端なのは更級日記で使用四例全て地の文である。その更級日記は「かく」を三例会話文で用い、地の文での二例を上まわっている。和泉式部日記は会話文に一例みられるのみである。更級日記は「かく」においては日記群全体でのありように反し、「かう」においてはその傾向を極めるありようである。「かう」の日記群での使用例三五例の大半を占める紫式部日記での一一例とかげろふ日記の一九例の計三〇例は、紫式部日記では地の文系の使用が会話文系でのそれを一例上まわり、かげろふ日記では逆に会話文系での使用が地の文系でのそれを一例上まわっている。その限りで両日記合せての使用は、会話文系、地の文系五分五分となっている。更級日記での地の文系での四例の使用が全てであると言ふありようが、この群での「かう」の地の文系使用傾向を決定しているとも言えるところがある。

随筆での「かう」の全例一九例中、会話文での使用一三例で六八・四%、心中表現での使用三例で一五・八%、地の文での使用三例で一五・八%となる。会話文系での使用率は八四・二%となり「かく」のその六二・五%を二二%程も上まわる。「かう」の物語群のその八一・一六%よりもさらに高いが同傾向にあると言えよう。

歴史物語での「かう」の全例四七例中、会話文での使用一三例（大鏡での二例を含む）で二七・七%、心中表現での使

用九例で一九・一%、地の文での使用二五例で五三・二%となる。地の文系での使用率が五三・二%（大鏡での二例を除くと五五・六%）となる。地の文系での使用が会話文系でのそれを上まわるが、「かく」のこの場合のその比率六四・五%より一一%程低い。「かう」の日記群のその五四・三%とほぼ並び同傾向にあると言える。

以上よりすると、「かく」は全体としては、会話文系・地の文系いずれもその使用数はほぼ同数と言え、その限りにおいて口語性が強いと言えないが、「かう」は会話文系での使用が地の文系を使用数において大きく引き離し、そのことにおいて口語性が強いと言える。

そのことを作品群別にまとめると、

物語群では、「かく」も会話文系での使用率がほぼ六〇%となり口語性の強さを思わせるが、「かう」は八〇%余りと会話文系での使用が大方を占め口語性が極めて強い。

日記群となると「かく」は地の文系での使用率がほぼ七五%と大方を占めるに対して、「かう」でのそれは会話文系・地の文系ほぼ同数的で「かく」にみられる文語性の強さはない。ごく普通の語としてあると言えようか。

随筆となると「かく」も会話文系での使用が多いが、「かう」はそれ以上に多く大方を占め物語群の場合に極めて類似する。

歴史物語となると、「かく」の地の文での使用率は高くなり、「かう」も地の文での使用が中半をこえ、日記群に類似する傾向を有する。

「かう」は、いずれの場合においても「かく」より会話語文系で用いられやすく作品群（物語群・随筆）においては八割の使用率をもつことから口語性が強いと言える。ただそのことから「かう」が和歌やその詞書的なものにおいて一切用いられないことの理由は見い出せない。それは和歌に対する当時の人の特別な或る思いにおいてではなからうか。

「かう」の会話語性を次ぎに「かく」の文法的用法において「かく」との比較において考えてみる。

(二) 文法的用法別での用いられ方

(1) 「あり・なり・成る」の賓語として用いられている場合

「かく」の使用例は一二二例で全用例二〇五七例の五・九%となるに對して、「かう」のそれは二六例で全用例四三四例の五・九%となり、両語ともにほぼ同比率を占める。この項での使われようは両語ともに同様の比率と言えるのである。一二二例中会話文での使用五三例で四三・八%、心中表現での使用一七例で一四%、地の文での使用四七例で三八・八%、消息文での使用一例で〇・八%、和歌での使用三例で二・五%となり、会話文系での使用率が五七・八%を占める。

「かう」のそれは全例二六例。会話文での使用一一例で四二・三%、心中表現での使用八例で三〇・八%、地の文での使用七例で二六・九%となり、会話文系での使用率が七三・一%と「かく」の場合を一五・三%もこえる。

物語群での「かく」の全用例一五二三例中、この項での使用五八例で三・八%、「かう」のそれは全用例三三三例中一二例で三・六%となり、両語の使用比率はこの作品群においてもほぼ変らない。

この群で使用例のないのは、「かく」は伊勢物語だけであるが、「かう」は竹取・伊勢・大和・落窪物語にみられない。うつほ物語に五例、源氏物語に七例みられるにとどまる。

「かく」の会話文での使用は二七例で六三・八%、心中表現での使用一一例で一九%、地の文での使用七例で二二・一%、消息文での使用一例で一・七%、和歌での使用二例で三・四五%となる。会話文系での使用率は七四・八%となり、全体でのその五二%を二三%近くも上まわる。「かく」は、この項で会話文系に用いられやすい。

「かう」の会話文での使用は七例で五八・三%、心中表現での使用五例四一・七%で、地の文・消息文での使用例が全くない。会話文系での使用が一〇〇%なのである。「かく」の七四・八%をさらに大きく上まわる。「かう」の全体でその七二・八%をも大きく上まわるものである。

尚、「かく」の和歌での二例はうつほ物語にみられる次の二首である。

・そこにかく有りときこゆる今よりぞ、いひてしことも思ひしらるゝ

(国譲中
二二六(六))

・こゝにかくあるどち誰か焼エざりし 袖の水尾にもぬるみやはせし

(国譲下
二八一(四))

日記群での「かく」の全例一一八例中、この項での使用一六例で一三・六%、「かう」のそれは全例三五例中一例で二・九%。「かう」の使用は無きに等しい。「かく」一六例の中、会話文での使用三例で一八・八%、心中表現四例で二四%、地の文八例で五〇%、和歌一例で六・二五%となる。地の文系が中半を占める。

「かう」の一例はかげろふ日記のもので会話文に用いられている。

「かく」の地の文での使用率は物語群のその傾向に馴染まぬものである。

和歌での一例はかげろふ日記のものである。

・身ひとつのかくなるたきを尋ねればさらにかへらぬ水もすみけり

(中
二三四(七))

随筆においては、「かく」は二例、「かう」は一例で問題にしにくい例数である。

歴史物語群の「かく」の全例三三五例中、この項での使用四四例で一三・一三%。「かう」のそれは全例四七例中一二例で二五・一三%となり、「かく」の比率を二倍近く上まわる。又、「かく・かう」共に全例でのこの項の比率六%弱を大きく上まわる。「かう」の方が「かく」よりこの群のこの項において倍ほど用いられやすいと言える。ただ大鏡には二例しかみられず、会話文中での意味用法は必ずしも本稿の他の例と同一のものとして扱うに相応しいと言えぬものがある。

・「…、をいの学問にもうけ給はりあかさまほしうこそ侍れ」といへば、重木もたゞ、「かうなりく」。さらんおりは、かならずつげ給ふべきなり。…」
(第六卷 二七七(十))

この場合の「かうなりく」は、相手の発言を諾う「そうだく」と云った意味で、極めて慣用句性の強いものかと思える。もしそうであれば除外すべきで、そうすると大鏡の「かう」の使用例は無いことになる。

歴史物語群での「かく」の全用例四四例中、会話文での使用一二例で二七・三%、心中表現での使用二例で四・五%、地の文での使用三〇例で六八・二%となる。地の文系での使用率が七〇%に近い。

「かう」のそれ(大鏡の二例を除く)は全例一〇例中、会話文での使用一例で一〇%、心中表現での使用二例で二〇%、地の文での使用七例で七〇%となる。地の文での使用率が「かく」にほぼ並ぶのである。そして物語群での「かく・かう」の傾向と同じくする。

尚「かう」にあつては「あり」の尊敬語「おはす」の賓語として用いられることが多い。

・折しもこゝにてかうおはしますを、家主もめでたき事に思ひ、人くもいみじう申給へり。

(巻第四・
一四七(十二))

この項での「かく・かう」各々の全用例に対する使用率は共に六%弱と美事な程一致する。即ち文法的用法での使用の片よりは少なくともこの「あり・なり・成る」の賓語としての用法に用いられる「かく・かう」に差はない。作品各群における会話文系・地の文系使用比率となるところの項としての特色がある。

物語群では、「かく・かう」ともに会話文系の使用例が地の文系のそれを圧倒する。「かう」にあつては一二例全例が会話文系で使用されている。

日記群では、この項の全用例に対する使用比率が「かく」の方が「かう」より高く、「かく」が用いられやすい。「かく」は地の文系での使用が中半をこえる。「かう」は僅かに会話文での使用例が一例みられるのみである。

歴史物語群では、この項の全用例に対する使用比率が「かう」の方が「かく」より高く「かう」の方が用いられやすい。「かく・かう」ともに地の文での使用率が七割程で会話文系のそれをかなり上まわる。

(2)、「言ふ・思ふ・す・見る・聞く」などの内容を示すものの場合

「かく」全体として五六〇例を数え、全用例二〇五七例の二七・二%を占めるのに対して、「かう」全体として一一二例を数え、全用例四三四例の二五・八%を占める。両語の比率はさして変わらず、この意味用法に用いられる割合は両語ともに同様と言える。

「かく」の会話文での使用例は一七〇例で、全例五六〇例中の三〇・四%、心中表現は四七例で八・四%、会話文系での使用率は三八・八%となる。「かう」の会話文での使用例六八例で、全例一一二例中の六〇・七%、心中表現は一六例で一四・三%、会話文系での使用率は七五%となる。全体としてみる限り、「かう」の会話文での用いられやすさは「かく」の倍近い。「かく」の地の文での使用は三一七例で五六・六%、消息文での使用九例で一・六%、和歌での使用一七例で三%となり、和歌での使用例が目立つ。「かう」の地の文での使用は二八例で二五%、消息文での使用七例で六・三%となる。

「言ふ・思ふ・す・見る・知る・聞く」などで最も用例の多いのは「言ふ」の内容を「かく・かう」が示している場合である。「かく」のその使用は三一六例でこの項の全例五六〇例の五六・四%、「かう」も六二例でこの項の全例一一二例の五五・三%とほぼ並ぶ。「かく」の会話文での使用九八例で三一%、心中表現での使用一四例で四・四%となり、会話文系での使用率は三五・四%となつて、この項全体での比率より三・四%下まわる。尚、地の文での使用は一九六例で六二%、消息文での使用六例で一・九%、和歌での使用二例で〇・六%である。「かう」の会話文での使用は四二例で六七・七%、心中表現での使用三例で四・八%となり、会話文系での使用率は七二・五%となる。「かく」のそののほぼ倍の使

用率である。地の文での使用は一一例で一七・七%、消息文での使用六例で九・七%となる。

「言ふ」の場合をさらに作品群別にみると次のようになる。

物語群において、「かく」の場合、全例二一一例。会話文での使用七四例で三五・一%、心中表現での使用一一例で五・二%、地の文での使用一一〇例で五六・九%、消息文での使用で二・八%となる。会話文系での使用率は四〇・三%となり、「言ふ」全体での三五・四%より五%程高くなるが、中半にならない。この傾向に反するのは落窪物語で、会話文系・地の文系共に七例ずつで相中半する。

「かう」の場合は、全例四九例中会話文での使用三七例で七五・五%、心中表現での例はなく、地の文での使用六例で一・二%、消息文での使用六例で一・二%となる。「言ふ」全体での比率七二・五%をさらに上まわる。「言ふ」全体での使用率と比べると「かく・かう」ともに会話文系での使用率を五%高くしているが、「かう」の会話文系での使用率に「かく」のそれはかなわない。

日記群においては、「かく」の場合、全例三二例。会話文での使用一例で三・一%、心中表現での使用一例で三・一%、地の文での使用二九例で九〇・六%、和歌での使用一例で三・一%となる。地の文系での使用率が九割をこえて会話文系でのそれを圧倒する。「かう」の場合、全例五例。かげろふ日記に四例（会話文二例・心中表現二例）、紫式部日記に一例（地の文）で八〇%が会話文系での使用となる。「かく」の場合と好対照をなす。

随筆においては、「かく」の場合、全例八例。会話文での使用五例で六二・五%、地の文での使用三例で三七・五%となる。会話文系での使用がより一般的である。「かう」の場合は、全例四例。会話文での使用二例で五〇%、心中表現・地の文での例各一例で各々二五%となる。会話文系での使用率七五%となり物語群系のそれに近い。「かく」の場合よりさらに高い使用率である。

歴史物語群においては、「かく」の場合、全例六一例。会話文での例一八例で二九・五%、心中表現での例二例で三・三%、地の文での例四一例で六七・二%となる。「言ふ」全体での地の文での使用率六二%を五%上まわる。「かう」の場合、栄花物語の四例が全例。会話文での使用一例で二五%、地の文での使用三例で七五%となり、「かく」の場合より七八%も高い。地の文系での「かう」の比率の高さは珍らしい。栄花物語での使用傾向ではある。

「言ふ」の内容を示すものに次いで多いのが「思ふ」の内容を示すものである。

「かく」の場合は、全例九二例。会話文での使用三七例で四〇・二%、心中表現での使用二一例で二二・八%、地の文での使用二五例で二七・二%、消息文での使用三例で三・三%、和歌での使用六例で六・五%となる。会話文系での使用率六三%となる。「かう」の場合は、全例二三例。会話文での使用一〇例で四三・五%、心中表現での使用七例で三〇・四%、地の文での使用六例で二六・一%となる。会話文系での使用率七三・九%は「かく」のそれより一〇・九%高い。いずれも心中表現での使用率の高さが会話文系でのそれを押し上げている。地の文での使用率は「かく・かう」ともにほぼ並ぶ。

この項全体との比較で言えば、「かく」の地の文使用率が半減、心中表現でのそれが倍増、会話文でのそれはほぼ一〇%高い。「かう」の地の文での使用率はほぼ並ぶが、心中表現でのそれは二・八四倍、会話文でのそれは一三%程落ちる。「かく」の物語群での全例五三例。会話文での使用二六例で四九・一%、心中表現での使用一四例で二六・四%、地の文での使用一〇例で一八・九%、消息文での使用二例で三・八%、和歌での使用一例で一・九%となる。会話文系での使用率は七五・五%となる。

物語群で以上の傾向に合わないものは、「かく」の場合、竹取物語は会話文での使用一例のみ。伊勢物語は使用例無し、大和物語は和歌での一例のみ。

日記群はそもそも用例が少なく、土左・紫式部日記はともに地の文に一例のみ、和泉式部日記は心中表現に二例みられるにすぎない。

随筆は心中表現に二例みられる。

歴史物語群は、大鏡の会話文に二例のみ。栄花物語は、ほぼ前述の傾向にある。

「かう」にあつては、物語群では、うつほ物語が会話文・心中表現に各一例。落窪物語は会話文に一例をみるとどまる。会話文系での使用率が一〇〇%となる。

日記群には全くみられない。日記が自らする文体が与つて大きいと思われる。

随筆は地の文に二例のみみられ、「かく」の場合と好対照をなしている。

歴史物語群は、大鏡になく、栄花物語は心中表現・地の文に各一例をみるとどまる。会話文系での使用率五〇%と一応言える。

いずれも用例が少なく傾向を指摘しにくい。

「思ふ」に次いで多いのは「す」の内容を示す場合のものである。

「かく」の場合は、全例四九例。会話文での使用一六例で三二・七%、心中表現での使用六例で一・二%、地の文での使用一八例で三六・七%、和歌での使用九例で一八・四%となり、和歌での使用率を加えて地の文系でのそれが五五・一%となつて会話文系のその四四・九%をこえる。「かう」の場合は、全例二十例。会話文での使用一二例で六〇%、心中表現での使用二例で一〇%、地の文での使用六例で三〇%となる。「かく」に反して会話文系での使用率が七〇%と地の文系での使用率をかなり上まわる。

物語群での「かく」の全例三〇例。会話文での使用一三例で四三・三%、心中表現での使用五例で一六・七%、地の文

での使用一例で三六・七%、和歌での使用一例で三・三%となる。会話文系での使用率は六〇%である。この項の傾向と異なるものは、伊勢・大和物語は地の文での使用例各二例・一例にとどまる。落窪物語は会話文での使用七例で七七・八%、地の文での使用二例で二二・二%であること、源氏物語は僅かに会話文に一例、地の文に一例をみる。

日記群も全部で三例と少なく、紫式部日記に会話文に一例、かげろふ日記に心中表現・地の文に各一例みられる。会話文系での使用率六六・七%となり、「かく」より少し高い。随筆にはみられず。

歴史物語群は、大鏡になく、栄花物語は会話文に二例、心中表現に一例、地の文に一例となり、会話文系での使用率は七五%である。「かく」の二五%と好対照である。

「聞く・見る・知る」は、その順に用例が少ないので省略する。

以上のようにみてくると、「かく」の場合、「あり・なり・成る」の賓語に用いられるときの地の文での使用率四二・二%と比べると六一・二%は少々高い。その結果をもたらすものに次の如き用例がうつほ物語に多いことが注目される。

・とばかり泣き入りて、かくの給ふ。

宿思ふ我いづるだにあるものを 涙さへなどとまらざるらん

との給へば、

(俊蔭
六四(七))

・侍従、あて宮の御方におハして、かく聞え給フ。

池水に玉藻しづむは鴉どりの 思ひあまれるなみだなりけり

とは御覽ずるや

と聞え給へば、

(藤原の宮
一七八(二))

・それに有難装束せさせて、かく聞え奉り給フ。

中古の指示副詞「かう」について

コノみや浅茅しげしと思へども 　また葎おほす宿も有りとか

とて、ヲかしき浅茅に、御文さしたり。

(忠こそ
一二四七)

・それに孫王の君の手して、かく書きたる。

君がため春日の野辺の雪間分け 　今日の若菜を一人摘みつる

あついものをば、かくなん仕うまつりにたる、聞し召しつべしや

と書きつけて、

(蔵開中
三六五四)

うつほ物語には、右例のような後述の和歌又は和歌に一言添えたものを前もって受けて指示する表現形式をとるものが九九例みられる。落窪物語には二例、源氏物語には一例しかみられない。このような場合、源氏物語では次のように「かく」を前もって用いないのが一般である。

・…と宣はするを、女もいみじと見奉りて、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり 　いと斯く思う給へましかば」と、息も絶えつつ、

(桐壺
六八)

・…など、こまやかに書かせ給へり。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見給ひ果てず。

(桐壺
十一十四)

うつほ物語での九九例は、うつほ物語独得の表現形式と言える。この九九例がなければ、会話文での使用一七〇例十心中表現での使用四七例は、会話文系の使用例として二二七例となり、地の文での使用二一八例十消息文での使用九例の二二七例にほぼ並ぶことになる。又、このような和歌や和歌に添えられた一言を指示するのが「かく」に限られていることは、

和歌やその詞書に「かく」しか用いられないことと同一線上にあることと言えよう。

「す」における「かう」の物語群での全例一三例。会話文での使用九例で六九・二%、地の文での使用四例で三〇・八%となり、会話文系での使用率が七〇%近い。

日記群での全例三例。会話文・心中表現・地の文での使用各々一例で、各三三・三%。会話文系での使用率は六六・七%となる。

随筆での用例は無い。

歴史物語群での全例四例。会話文二例で五〇%、心中表現・地の文各一例で各々二五%となる。会話文系での使用率七五%である。

以上よりして、「言ふ・思ふ・す・見る・知る・聞く」などの内容を示す場合の使用比率は前項同様ほぼ同じと言える。「かく」の会話文系での使用率は四〇%足らずであるに対して「かう」のそれは七〇%弱と一・八倍の使用率となる。この項でも「かう」の会話文系での使用率は際立つ。

その内容を示すことになる最も用例の多いのは「言ふ」である。その「言ふ」の内容を示す「かく・かう」のこの項全体の用例に対する比率は五六・四%と五五・三%で、これ又ほぼ並ぶ。が会話文系での使用率となると「かく」三五・四%に対し「かう」六七・七%と「かう」の方が倍をこえる。ついで多い「思ふ」にあつては「かく」の会話文系での使用率が中半をこえて六三%、「かう」はさらに高く七五・九%となり、会話文系での使用率は大変高い。「す」にあつては「かく」の会話文系での使用率は中半を割り、「かう」は七〇%と高い。

この項での「かく」の会話文系での使用率を下げているもののうちつほ物語での「かく」が後述の和歌や和歌とそれに添えられた一言を含むものを前もって指示する表現形式例の多さを指摘した。それは、「かく」が和歌やその説明文で用いら

れ、「かう」をそこから排除していることに連なるとしている。

(3) (一)・(二)を除く連用修飾語として用いられている場合

①、程度副詞化している場合のもの

受けて指示する内容を有しつつ(指示副詞でありつつ)その意味において修飾語句の程度がかなりの高度・極めての高度であることを「かく・かう」が示している場合のものとしてきている。^{註1}

源氏物語から例をひくと。

・…とて、御文たてまつる。「目も見え侍らぬに、かくかしき仰言を光にてなむ」とて見給ふ。

(桐壺
一一八)

・「なぞかう暑きにこの格子はおろされたる」と問へば、

(空蟬
九五二)

「かく」の場合、全例二〇五七例中この意味用法に用いられているものは六〇四例で、二九・四%を占める。「かう」の場合、全例四三四例中この意味用法に用いられているものは一四四例で三三・一%となる。三・七%程「かう」の方が使用率が高い。

その「かく」にあつて、会話文での使用二七九例で四六・二%、心中表現での使用六七例で一・一%、地の文での使用二三八例で三九・四%、消息文・和歌での使用はともに各一〇例で各々一・七%となる。会話文系での使用率は五七・三%となり、地の文系での使用率を上まわる。「あり・なり・成る」の場合とほぼ同率である。一方「かう」のそれは、全例一四四例中、会話文での使用七四例で五一・四%、心中表現での使用三五例で二四・三%、地の文での使用三一例で二二・五%、消息文での使用四例で二・八%となり、会話文系での使用率は七五・七%となる。「かく」のそれより一八・四%も高い。「あり・なり・成る」の賓語を示す場合のそれより二・六%高いがほぼ同じと言えなくもない。

「かく」の場合を作品群にみると、

物語群においては、全例四八四例。会話文での使用二五七例で五三・一%、心中表現での使用五〇例で一〇・三%、地の文での使用一六八例で三四・七%、消息文での使用七例で一・四%、和歌二例で〇・四%となる。会話文系での使用率は六三・四%となり、この項でのそれより六%余り高い。竹取物語を始めそのような傾向にある中で、伊勢物語は地の文に二例しかなく、大和物語は、会話文系五例・地の文系四例で、前者の使用比率は五六・四%となり、この項でのそれの五七・三%に近い。

日記群においては、全例一九例。会話文での使用四例で二一・一%、心中表現三例で一五・八%、地の文での使用九例で四七・四%、消息文での使用三例で一五・八%、和歌での使用一例で五・三%となる。会話文系での使用率は三六・九%となり、地の文系使用率六三・一%は物語群の会話文系使用率である。そもそも使用例が少ないのであるが、一九例中一五例までかげろふ日記のもので、残る四例は土左・和泉式部日記に地の文に各々一例、紫式部日記に心中表現に一例、更級日記に会話文に一例をみる。

随筆においては、会話文に一例、心中表現に二例と会話文系での三例をみるのみである。

歴史物語群においては、全例九一例。会話文での使用一七例で一八・七%、心中表現での使用一二例で一三・二%、地の文での使用六二例で六八・一%となり、地の文系での使用率六八・一%は日記群でのそれより五%高い。大鏡でのそれは七三・七%でさえある。

一方「かう」の場合は、

物語群にあつては、全例一一八例。会話文での使用六五例で五五・一%、心中表現での使用二八例で二三・七%、地の文での使用二三例で一九・五%、消息文での使用二例で一・七%となる。会話文系での使用率七八・八%は、この項のそれの七五・七%よりさらに三・一%高い。「かく」のこの群でのそれの六三・四%を一五・四%こえる。

日記群にあつては、全例一〇例と少ない。会話文での使用四例で四〇%、心中表現での使用二例で二〇%、地の文・消息文での使用各二例で各々二〇%となる。会話文系での使用率六〇%は、地の文系での使用率より多いが、この項のその七五・七%より一五・七%も低い。全例一〇例中五例までがかげろふ日記の例で、紫式部日記三例中二例は会話文での使用で、和泉式部日記一例も又会話文でのそれである。更級日記の一例は地の文に用いられている。

随筆にあつては、会話文に三例をみるのみで、「かく」の場合と全く同様である。

歴史物語群にあつては、全例一三例。会話文での使用二例で一五・四%、心中表現での使用五例で三八・五%、地の文での使用六例で四六・二%となる。会話文系での使用率五三・八%と中半をこえる。「かく」のこの場合の会話文系での使用率三一・九%とはかなり傾向を異にする。

程度副詞化と云う意味用法においては、会話文系での使用率の高さが予想されたが、「かく」にあつては「あり・なり・成る」の場合と変わらず、「かう」にあつても二・六%高いにとどまっている。物語群と日記群・歴史物語群との会話文系での使用率の対照が「かく」の場合著しく、「かう」にあつては程度的差違にとどまる。随筆は物語群の傾向をもつ。

②、陳述副詞化している場合のもの

「かく・かう」がそれが受けて指示する指示副詞として意味機能しつつその意味において云わゆる陳述を示す語句を修飾して、その陳述のありようの程度をかなりの高度・極めての高度であることを意味しているものをこの場合のものとしてきている。^註

源氏物語より用例をあげると、

・「なぞや。斯くかたみにそぼくしからでおはせよかし」と、うちつぶやかれ給ふ。

(葵三三三(八))

・「いと取り申しがたき事なれど、わが君、かう覚えなき世界に、かりにても移ろひおはしましたるは、」

(明石七六(十三))

「かく」にあつては、全用例二〇五七例中、この項での使用一四一例で六・九%、「かう」にあつては、全用例四二八例中、この項での使用二三例で、五・四%となる。「かく」のそれより一・五%低くなる。全用例に占めるこの項のものとしては、ほぼ使用率に変わりないと言えよう。「あり・なり・成る」の賓語として用いられる場合の五・九%台に並ぶ。その「かく」において、会話文での使用例六六例で四六・八%、心中表現での使用例三三例で二三・四%、地の文での使用三四例で、二四・一%、消息文での使用二例で一・四%、和歌での使用六例で四・三%となる。会話文での使用率六九・二%と七割近い。

物語群においては、全例一〇五例。会話文での使用は五七例で五四・三%、心中表現での使用二五例で二三・八%、地の文での使用二〇例で一九%。消息文での使用二例で一・九%、和歌での使用一例で一%となる。会話文系の使用率は七七・八%となり、程度副詞化のそれより二〇・五%も高い。竹取・大和物語には全く用例がみられず、伊勢物語は会話文に一例みられる。これらを除けば残る物語での使用例は物語群の傾向と同じと言える。

日記群においては、用例が全部で四例しかない。心中表現での使用一例で二五%、地の文での使用三例で七五%となる。紫式部日記に心中表現・地の文での使用各々一例がみられる。土左日記に無く、和泉式部・かげろふ日記に各々一例が地の文でみられる。

随筆には会話文で一例みられるのみである。

歴史物語においては、全例二六例。会話文での使用八例で三〇・八%、心中表現での使用七例で二六・九%、地の文での使用一〇例で三八・五%となる。会話文系での使用率五七・七%となり、この項でのそれより一一・五%低い。大鏡での使用は地の文の一例にすぎないことから、以上の使用率は榮花物語のものと言える。

「かう」にあつては、全例二三例。会話文一五例で六五・二%、心中表現五例で二一・七%、地の文での使用三例で一

三%となる。会話文系での使用率八六・九%と地の文系を圧倒する。「かく」の七二%よりさらに一四・九%も高い。

物語群においては、全例二〇例。会話文での使用一三例で六五%、心中表現での使用五例で二五%、地の文での使用二例で一〇%となり、会話文系での使用率が九〇%とこの項でのその八六・九%をさらに三・一%上まわる。「かく」のその七八・一%よりも一一・九%高い。竹取・伊勢・落窪物語に無く、大和物語に会話文・心中表現に各一例。うつほ物語に会話文に一例、残る一七例は源氏物語のものである。

日記群においては、全くみられない。随筆においては、会話文に一例のみ。

歴史物語群においては、大鏡にみられず、栄花物語に会話文・地の文に各一例みられる。

「かう」のこの項の使用率の傾向は、源氏物語のそれと言えるもので、会話文系で圧倒的に多く使われている。

「かく」の使用率も「かう」よりは少し低いが大方を会話文系で占める。日記群での使用は対照的に地の文系が多く、歴史物語群は会話文系が六割弱にとどまっている。

③、①・②以外の連用修飾語として用いられている場合のもの

この場合のものについては、先稿で二分類しているが、本稿では一つのものとする。

本項の例を源氏物語よりひくと、

・「…を、さるべきにや、げに斯くあはめられ奉るもことわりなる心惑ひを、みづから怪しきまでなむ」など、…

(帯木
八〇(四))

・あやしき馬に、狩衣姿のないがしろにて来ければ、見知り給はぬに、さすがに、かう他方に入り給ひぬれば、心も得ず思ひけるほど、…

(末摘花
二三七(七))

「かく」にあつて、この項の全例六三二例で全用例二〇五七例の三〇・七%を占める。「かう」にあつてはこの項の全例

一二九例で全用例四三四例の二九・七%を占める。「かく」も「かう」も全用例に対するこの項の使用率は三割程と変らない。

その「かく」の会話文での使用例二九二例でこの項の「かく」の全例六三一例の四六・三%、心中表現での使用四六例で七・三%、地の文での使用二五二例で三九・三%、消息文での使用七例で一・一%、和歌での使用三四例で五・四%となる。会話文系での使用率は五三・六%と五割強である。

物語群での「かく」の全例四九七例中、会話文での使用二六三例で五二・九%、心中表現での使用四〇例で八%、地の文での使用一七六例で三三・六%、消息文での使用六例で一・二%、和歌での使用一二例で二・四%となる。会話文系での使用率六〇・九%は、この項のその五三・六%を七・三%上まわる。和歌でそれは半減する。

日記群での「かく」の全例三〇例中、会話文での使用六例で二〇%、心中表現での使用二例で六・七%、地の文での使用二〇例で六六・七%、消息文・和歌での使用は各々一例で、ともに三・三%となる。会話文系での使用率二六・七%となり、物語群のその六〇・九%とは全く相反する使用傾向になっている。地の文系の使用が四分の三程を占める。中にあって和泉式部日記は会話文系・地の文系共に二例で相中半しているが、土左日記は四例全て地の文での使用である。

随筆での使用例は五例。会話文での使用四例で八〇%、地の文での使用一例で二〇%となり、物語群でのそれよりも一九%程上まわる。

歴史物語群での使用全例七七例。会話文での使用一九例で二四・七%、心中表現での使用四例で五・二%、地の文での使用五三例で六八・八%、和歌での使用一例で一・三%となる。会話文系での使用率は二九・九%とほぼ三割にすぎない。日記群のそれを少し上まわるが、極めてそれに近い。

一方「かう」においては、この項の全例一二九例。会話文での使用七四例で五七・四%、心中表現一八例で一四%、地

の文での使用三四例で二六・四%、消息文三例で二・三%となる。会話文系での使用率七一・四%は「かく」のその五三・六%を一七・八%上まわる。物語群での全例九七例。会話文での使用六一例で六二・九%、心中表現での使用一六例で一六・五%、地の文での使用一九・六%、消息文での使用一例で一%となる。会話文系での使用率が七九・四%となり、地の文系での使用を圧倒する。「かく」のそれより二〇%上まわる。うつほ物語は会話文での使用二例のみ。竹取・伊勢・大和物語は用例がみられない。

日記群での全例一四例。会話文での使用二例で一四・三%、心中表現での使用一例で七・一%、地の文での使用九例で六四・三%、消息文での使用二例で一四・三%となる。会話文系の使用率二二・四%、地の文系での使用率七八・六%となり、後者が前者を圧倒する。物語群の両者の使用率がほぼ交替する。

随筆での全例八例。会話文での使用七例で八七・五%、地の文での使用一例で一二・五%となり、会話文系での使用比率八七・五%は物語群のその七九・四%を八・一%上まわる。「かく」の随筆での会話文系使用率八〇%よりさらに高い。

歴史物語群は全例一〇例。大鏡に用例がない。会話文での使用四例で四〇%、地の文での使用六例で六〇%となる。会話文系での使用率四〇%、地の文系でのその六〇%は日記群のそれに類する。「かく」の歴史物語での地の文系の使用率六八・八%よりは八・八%下まわるが共に六割台である。

この項にあつては、「かく」「かう」ともに項全体としては会話文系での使用が地の文系での使用を上まわるが、上まわり方は「かう」において著しい。物語群・随筆においても同様のことが言える。日記群・歴史物語群においては、地の文系での使用が会話文系でのそれを上まわる。「かく」・「かう」ともに日記群において著しい。「かく」は歴史物語群においても著しいと言える。

おわりに

「かう」を「かく」と比較して、文法的用法と作品群における会話文系・地の文系での使用状況を調べると以上のようなになる。

全体として言えることは、

- ① 「かう」の使用例は「かく」の四分の一程である。「かく」程によく用いられない。
- ② 「かく」は資料としたどの作品にも用いられているが、「かう」は作品により用いられ方に傾向がある。

全く用いられないのは、勅撰和歌集、竹取物語・伊勢物語・土左日記。大鏡を入れてよいかと思う。又、大和物語は和歌に対する物語（説明）が短い章段迄は用いられない（勅撰和歌集の詞書にも用いられないことに通じる）。さらに後述の和歌や和歌とそれに一言添えたものを前もって指示する場合には「かく」しか用いない。物語・日記・随筆・歴史物語中の和歌にも「かう」は用いない。

- ③ 文法的用法別（文中の（一）・（二）・（三）の使用率は「かく」「かう」ともにほぼ同率と言える。

- ④ 「かく」「かう」の全用例に占める会話文系の使用率は、五二%と七二・八%であり、いずれも中半をこえるが、「かう」のそれはこえ方が著しい。「かく」は会話文系・地の文系いずれにも同じように使われるが、「かう」は会話文系で使われやすい。その限りで「かう」の方が口語性が強いと言える。

- ⑤ 作品群別にみると、(i)物語群では「かく」も会話文系での使用率は五九・四%となり、会話文系で使われやすくなっている。「かう」は八一・六%と大方を占める。ただ「かく」の場合(ii)項「言ふ・思ふ・す」などの内容を示す場合のもののみ五〇%に満たない。その原因についてはうっほ物語に顕著にみられる、和歌や和歌とそれに添えられている一言を前

もって指示する表現形式に「かく」が用いられることが大きく与っていると見える。

(ii) 日記群での会話文系での使用率は「かく」は二五・四%、「かう」は四五・七%といずれも五〇%をわっている。「かく」のそれはことに著しい。日記と云う文体が必然的に会話文・心中表現を余り必要としないことが大きな要因に思う。

(iii) 随筆での「かく」の使用率は六二・五%と作品群の中で最も高い。「かう」のそれも又八四・二%と際立つ。

(iv) 歴史物語群の「かく」の使用率三五・五%と日記群について低い。「かう」のそれも四六・八%と日記群について低く五〇%を割っている。会話文・心中表現の少なさと云う文体によると言えようか。

「かう」の和歌への忌避の範囲は明確になつたと思う。又、土左日記・竹取物語・大鏡で排除されることを成立時代の古さと男の手になること、つまりは仮名文とも言えども漢文訓み下し文体の残滓と言える多分に心理的な会話文系での使われやすさの口語性への忌避からのものにまずは考える。

何回か見直してのことではあるが、数値の誤りは多々あるかに案じます。大筋のことと御理解下さればと思っております。

(平成一六年二月一五日稿)

註1 ・中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について―源氏物語を資料として―女子大國文第百二十五号 (平成一年六月)

・中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について (二) ―源氏物語以前の物語作品を資料として―女子大國文第百二十六号

・中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について (三) 女子大國文第百二十八号

・中古に於ける指示副詞「かく」の程度副詞・陳述副詞化について 女子大國文第百三十号

・中古に於ける指示副詞「かく」＋係助詞の意味用法(一)(かくなむ・かくぞ・かくこそ・かくや)――その程度副詞・陳述副詞性
――女子大國文第百三十一号

・中古に於ける指示副詞「かく」＋係助詞の意味用法(二)(かくも・かくしも・かくは)――その程度副詞・陳述副詞性――女子大國文第百三十二号

・中古に於ける「指示副詞「かく」＋副助詞」の程度副詞・陳述副詞性 京都語文第九号(佛敎大学国語国文学会)二〇〇二・一〇・五

註2 「かく」「かう」いずれも係助詞・副助詞などを伴わないものに限っている。

註3 「かうのみ」・「かうて」各一例が会話文中にみられる。

註4 「と見かう見れど」が地の文に一例、「かうかう」が二例会話文中にみられる。

註5 『指示副詞「かく」使用歌による歌群表現――『古今和歌集』『和泉式部統集』『四条宮主殿集』における――』山本淳子著『国語

国文』第七十卷第二号(平成二三年二月)

註6 『国語学論集』第一輯(一九七八・三)「副詞「かう」についての小考」河内章著

(京都学園大学教授・本学名誉教授)